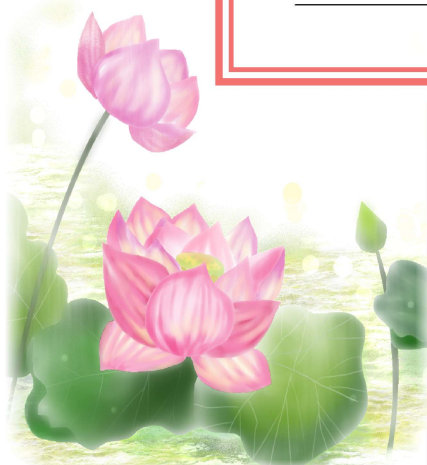


**いのちのふるさと**

お浄土に帰るんだから大丈夫だよ。阿弥陀さまが守っていてくださるんだから…。南無阿弥陀仏を唱えていけば大丈夫だよ。あんなに会いたがっていた母さんに会えるんじゃない。可愛がってくれていたおばあちゃんにも。父さん母さんは火を灯して待っていてくれるよ。姉さんも、きっと行くから待っていてね…。

『心を支える・ビハーラ』(田代俊孝 編)より

これは宮崎正子さんという看護師の女性が、最愛の妹を40代の若さで見送ったとき、ベッドでかけ続けた言葉です。それまで宮崎さんが看護師として見てきた患者さんの中には、告知もされず「わたし、ガンなんじゃないの？」と周囲を疑うことで、次第にまわりの人も見舞いに行きにくくなり、ついには長年連れ添ってきた家族とさえ信頼関係を失ったまま死を迎える人が、数多くいたといえます。

幼い頃に母親を亡くし、二人で寄り添うように生きてきた妹の三知子さん。その妹が病の床に伏したとき、宮崎さんは手探りながらもできるかぎり、**やがて行く「いのちのふるさと」**について語り合いました。

宮崎さんをサポートしてきた『死そして生を考える研究会』代表の田代俊孝さんは、告知のあり方は家族それぞれの事情によると前置きした上で、次のように語っています。

なぜ私たちが苦しみを持ったり、悲しみを持ったりするのかといえば、やはり死をタブーにしているからなんですね。生はプラス、死はマイナス。ところが現実には、私たちはみな「死すべき身」なんですね。

だから、死ということをきちっと人生の一つであると見すえていくという、そういった学びが普段から我々には必要なんじゃないかと思います。

この妹さんは死ということに直面して、**思いを超えた命を支える世界、大きな世界があるんだという**、そういう出逢いがあったんだと思います。



大切な誰かを失ったとき、あるいは失おうとしているとき、死についてはできるだけ触れないでおくのか、それとも「命を支える世界・大きな世界」を思いながら・語りながら見送るのか。たいへん難しい問題ですが、今いちど考えてみるのが、残された者の務めなのではないかと思います。再び大切な誰かを看取る時のために。そして、自らが看取られる時のために…。

